「ニオイグチイゾナ」 ― 拒絶を歓迎する禍

イゾナ科

危険度:★☆☆☆☆

生息数:\*\*\*\*

生態

ことによって接触するという生態を持つ。 ちなみにニオイグチイゾナの名前の由来に そのため憑く箇所は唇に限られる。ニオイ る分泌液を憑いた人間に経口摂取させる 疑問を感じることもなくなるのである。 えることなく、また自身の攻撃的な思考に として憑かれた人間は大きなストレスを抱 の大部分は摂取されて消えてしまう。結果 する。この禍の基礎代謝は非常に高く、多 な思考による脳のストレスを摂取して成長 ようになるのである。この禍はその攻撃的 たとき、その対象の存在を消したいと思う 作用する。それによって人間は拒絶を感じ 理的拒絶」を感じた際に攻撃的になるよう 触するのではなく、血液を変換して作られ くのエネルギーを必要とするためにストレス グチイゾナの分泌する液体は、人間が「生 イゾナ科の中では珍しく血管から人間へ接

飛び散るのである意味恐ろしい禍でもある。ある。しかも言葉を発する際に分泌液がた人間からすると耐えられない程の悪臭で分に成長している人間やカカシカに憑かれ強く、この禍を感じるカカシカモドキが十強く、この禍を感じるカカシカモドキが十

解訪

それ自体は生きるために必要な感覚であ 述のバランスの崩れがこの禍の最大の危険性 くれることによって問題にはなりづらい。前 体はストレスをニオイグチイゾナが摂取して 憑かれた人間の特徴である。ただしそれ自 思考に支配されることになるのがこの禍に である。その結果を予想する前に攻撃的な 消したとしても需要と供給のバランスを崩 く見られる。これらはその分野そのものを などの趣味趣向の分野でその不一致が多 ものであればグロや暴力、性的表現、音楽 はない。その不一致を目の当たりにした際 の感覚は必ずしも万人で一致するわけで る。ただし性差や文化の差などによってそ 走するという最悪の結果を招くだけのもの す結果になるだけで、抑圧された需要が暴 性を考えるという行動を取る。典型的な 留し、感じた対象の存在意義や価値、危険 健常な人間であればその拒絶感を一時保 生理的拒絶というのは人間に必ず存在し、

深層心理に残されるくらいである。たら当然攻撃されるだろう」という不安がであり、他の危険は「自分がもし拒絶され

対処法

ばあとは特殊な方法を用いずとも対処で まずは攻撃的になる自分を客観的に理解 によって抑えることが可能で、また他のイゾ 制心を持っていれば問題はない。じきにニオ い場合が多い。そこにさえ気づけてしまえ されやすく、その存在自体に気づけていな らない感情というものは自分の中でも無視 することが重要となる。ストレスの原因とな 成体への対処も容易である。対処する場合 イグチイゾナは死滅するだろう。そうでな 撃的な感情を抑えることができる強い自 そこまで危険度の高くない禍ではあるが、 ナ科の禍と違って快楽への依存もないために い場合でも攻撃的な感情というものは訓練 つでもある。この禍に憑かれた場合でも攻 個人的には優先的に対処してほしい禍の

